



図書館だより

第12号 平成20年2月発行
弓削商船高等専門学校図書館

目次

平成19年度作文コンクール優秀作……	1
平成19年度学生図書委員紹介……	1
寄稿「わたしなりに読む」	
落合 敏邦 学校長……	2
特集 おすすめの一冊……	3
図書館からのお知らせ……	6
平成18年度図書利用状況……	6
編集後記……	6



瀬戸内にある弓削の海は大変穏やかで、メバルやイカなどの釣りを楽しむ学生も多い
(写真提供・15・廣松 孝紀)

平成19年度作文コンクール優秀作

優秀作

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| S 1 桑田 大輝「夏休みの水泳」 | I 4 安部 琴音「インターンシップに参加して」 |
| S 1 襲山 洋行「ガンに生かされて」を読んで | I 4 浜原 周平「千原ジュニアの「14才」を読んで |
| S 2 安田 大樹「地球温暖化と京都議定書」を読んで | I 4 村上 彩「インターンシップで学んだこと」 |
| M 2 中本 祐二「私の挑戦」 | |
| S 3 武田 浩征「羅生門」を読んで | |

佳作

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| S 1 慶廣 将平「部活」 | I 1 楠橋 江里香「私の音楽に対する気持ち」 |
| S 1 寺田 淳「人のありがたさを実感して」 | I 1 十河 洋介「今年の夏の暑さについて」 |
| S 1 渡邊 哲也「夏休みの思い出」 | I 1 力石 良「合格までの道」 |
| I 1 井出 由茄里「エブリリトルシング」を読んで | S 2 黒住 勇人「郵便局のバイト」 |
| | M 3 ギブラン「18きっぷで行こう！！」 |

平成19年度学生図書委員紹介

- | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------|
| S 1 井上 貴文 | M 2 中川 雅裕 | I 3 笹井 愛実 | S 5 滝川 哲也 |
| M 1 宇都宮 康大 | I 2 齊藤 類 | S 4 浅海 聡一郎 | M 5 阿部 辰也 |
| I 1 岡野 弘志 | S 3 堀川 広了 | M 4 鹿野 正治 | I 5 服部 和典 |
| S 2 黒住 勇人 | M 3 須田 健太 | I 4 宮原 亜希 | |

私なりに読む

学校長 落合 敏邦



息子と何気なく立ち寄った本屋で、急に思い立って、「歴史をつくった先人たち、週刊「日本の100人」第1号 織田信長」を定期

購読することを決めました。2006年の2月頃です。もうすでに2年が経ってしまったことになります。古代から現代に至るまで、日本の歴史を語る上で欠かすことのできない人物を時代やジャンルを問わず100人取り上げ、その一人ひとりの生涯を振り返ることによって日本という国の歩みをひも解こうというものです。33ページ、写真などのビジュアル資料、年表を中心に出来事が記述されているものです。

2週間ごとに2冊ずつ送られてきます。初めの頃は、大体2週間で2冊読み終わるペースでしたが、あまり関心のない人物については、読むスピードが極端に落ちてしまいます。

読むシチュエーションは、基本的に、通勤のとき、寝るときです。弓削に来てからは通勤時の読書がなくなったので、読破ペースが随分と落ちてしまいました。読み方は、徹底的に読む、隅から隅まで読むということです。途中で前後関係が分からなくなれば、

前に戻り読み直しです。どうも、受験勉強の名残で、隅から隅まで徹底的に目を通す習慣が残っているようです。多分ここ10年くらいは、年を取ってしまったせいか依怙地に拍車がかかっている感じがします。読めない漢字、意味不明な用語、あいまいな用語が何度も出てくると気になって仕方がありません。すぐ辞典で調べてしまいます。従って、読むペースが一段と遅いというわけです。また、ポイントになるところは、線を引きます。印象深いところは線を引きます。読み返すときにはとても参考になります。だから図書館では、本を借りられません。どうも、線を引きたくなる、ページに折れ目を入れたいからです。寝るときにも必ず読みますが、通常1ページも読み終わらないうちに寝てしまうのがパターンです。不眠症の心配は全くありません、最高の睡眠薬かも知れません。そんな調子なので、一向に読み進めません。そのうち間が空いてしまうと、前読んだところがどうであったか忘れてしまい、また前に戻って読み直して寝てしまいます。

今は、第85号森鷗外を読んでいます。これまでに、100冊送付されて、更に番外編として5冊送られてきています。未読のものは、21冊でした。次は同じ時代の第100号夏目漱石を読もうと思っています。



図書館の開館時間が変わります

平成20年4月1日から図書館の開館時間が以下ようになります。

- (1) 平日 午前8時30分から午後6時まで
(夏季休業等の休業期間中は、午後5時まで)
- (2) 土、日曜日 午前10時から午後4時まで
(夏季休業等の休業期間中は、閉館)

特集 おすすめの1冊

学生のみなさんと各科の先生方よりおすすめの1冊を紹介していただきました。興味深い本があれば、ぜひ手にとって読んでみてください。新たな発見や感動があるかもしれません。

田村裕著『ホームレス中学生』（ワニブックス）

昼夜を問わず親子や身内同士の悲惨な殺人事件のニュースが飛び交い、離婚も当たり前のようになり、簡単に家族の絆を手放してしまう昨今、「家族」の存在に重点を置いて書き下ろしたノンフィクションのお話。特に男の子はなかなか口に出せない「お母さん」という存在への思いを綴った本です。もう一度家族がいるという当たりの幸せを再確認してみようじゃないか、という気分にしてくれる本です。

（商船学科4年 木村 光生）

平山瑞穂著『忘れないと誓ったぼくがいた』（新潮社）

物語は一つのDVDテープの存在から始まる。かと言って主人公は監督でも映画研究部に所属する学生でもない。ただの男子高校生。ある女の子と出会い、不思議な体験をし、そして自分の中の彼女の記憶を消し去らないように努力してゆく。読み終わった時、「もしかしたらこの“ある女の子”のような人が、現実の世界にいるのかもしれない。いや、いる！」そう思わせるほど、吸い込まれていく、引き込まれていく物語だ。

（商船学科4年 小川 亮）

三輪茂雄著『粉と粒の不思議』（ダイヤモンド社）

某教官おすすめの1冊。この本では、気体、液体、固体以外に第四の存在状態「粉体」について書いてある。粉体という言葉は初めて聞いた人は多くはないだろう。粉といえば小麦粉やセメントの粉などを連想すると思う。吹けば空気中に舞い上がって気体とともに行動し、水に入れると液状になり、固化すれば固体の状態になる。

つまり、粉体は気体、液体、固体という物質の三態を変化する特性を持っている。その特性を生かしたものの構造や原理を説明している。

内容は難しく、何回読んでも理解できていない部分もある。けれども、自分の身のまわりにあるものの構造を知ることができて面白いので、読むのが楽しい本である。もう少し勉強してからまた読み返してみようと思う。

（電子機械工学科3年 栗田 英幸）

あさのあつこ著『バッテリー』（角川文庫）

「そうだ、本気になれよ。本気で向かってこい。子どもだとか小学生だとか中学生だとか、関係ないこと全部すてて、俺の球だけを見ろよ」

そんな自信家の野球バカ、巧は親の都合で引っ越した先で、ランニングの途中で豪という同い年の少年と出会う。豪は大人顔負けの巧の投球をたった5球でとらえた。巧は『豪となら最高のバッテリーが組める』そんなことを強く思うようになる。そして、巧は祖父や弟、学級の野球部員たちと関わっていくうちに野球に対する感覚がより強くなり、人間的に成長していく。

弟への嫉妬、大人たちに対するいらだちなど、巧の性格や心情が鮮明に色濃く描かれており、普段本をあまり読むことのない人にも、野球に興味のない人にも楽しめるおすすめの1冊。

（電子機械工学科4年 鹿野 正治）

内海慶一著『ピクトさんの本』（ビー・エヌ・エヌ新社）

何だこの本はと思いながら2～3ページめくるとこのピクトさんの正体が僕の頭の中で判明した。ピクトさん、被害者の被、苦しいの苦、に人と書いてピクトさん。彼はいつも僕らが見ている「危ない」とか「危険」などに現れる、ちょっと黒人並みに黒い人のことであつた。なるほど、読書感想文でイヤになっていた自分がいかに小さい人であるかというのわかる内容だった。本の目次には、転倒、頭打ち、落下、つまずき、などありとあらゆるピクトさんの写真が載っていた。なるほど、世の中に不幸な人がいるとしたらこのピクトさんに違いない、僕らに危険を知らせるためにいつも不幸な目に365日不眠不休で働いてくれているのだから。本の言葉を借りるなら自己犠牲にもほどがあるっといった感じだ。しかし、ピクトさん「飛行機からの脱出注意」ってどういうことだ？とまあ世界各国からのピクトさんの写真にプツと思わず吹き出して笑ってしまうような内容なので書店で見かけたらぜひ購入をお勧めしたい。

（情報工学科5年 服部 和典）

足立幸信著『アホでも数学者になれる法』（清流出版）

タイトルを見て、楽に数学者になれると思ってはいけません。著者の経験から、毎日の日課でアホのように努力すれば数学者になれると、言ってます。どんな努力をしたのかな。この本には、岡潔の話も出てきます。有名な数学者らしいですよ。私も名前だけは聞いたことがあります。また、著者はmixiに登録してい

る様子です。どれかに興味を持ったかな。

福岡伸一著『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書）

本書の帯には、「読み始めたら止まらない 極上の科学ミステリー 生命とは何か？」と有りますが、この本を読んで、ミステリーが解けるわけではありません。この本を読んだ後は、ミステリーが簡単には解けないことを知るでしょう。分子生物学の発展（特にDNAの解明）に関連した人々の話も出てきます。学生の時に「二重らせん」（ワトソン著）読んだことを懐かしく思い出しました。

（以上2冊、総合教育科 久保 康幸 先生）

瀬尾まいこ著『卵の緒』（新潮文庫）

みなさんは、誰とどんな風につながっていますか。家族、友人、恋人、仲間、同志、もしかすると言葉に出来ないけれども確につながっている関係というものもあるかもしれません。この話は、そんな人と人とのつながりの強さや暖かさを感じさせてくれます。主人公育生は小学四年生。自分は捨て子ではないか、というのが長年（？）の悩みです。ある日学校でへその緒の話聞いた育生は、それはもうどきどきしながら母さんに自分のへその緒を見せてくれるよう頼みます。深刻な育生に母さんは、けろりと卵の殻を見せて卵で産んだと言います。そんな母さんと育生の生活は愛情たっぷり、お互いがしっかりとつながっています。人は誰も、すべてに満ち足りているわけではありません。欠けた部分を何でどう包むかということ、人と違っていてもいいのだということ、幸せの形には色々あるということ、ふと考える、そんな話です。寒い夜のホットココアのように、贅沢ではないけれども特別な世界を、ぜひどうぞ。

（総合教育科 猪川 優子 先生）

宮崎正勝著『鄭和の南海大遠征』（中公新書）

15世紀の中国「明」の時代、皇帝「永楽帝」の命を受けた宦官の鄭和は、2万7千人もの乗組員からなる大艦隊をひきいて、南シナ海、ジャワ海、インド洋を結ぶ航海を7回にわたって行った。中国による世界秩序の再編を目指した永楽帝の野望の壮大さと、それを可能にした巨大船の造船技術や航海術は、現在のわれわれから見ても驚きの連続である。鄭和の艦隊がインド洋への航海を開始したのは1405年。バスコダガマの艦隊がポルトガルを発ち、初めてアフリカ大陸の南端の喜望峰をまわってインドのカルカットに到着した1498年の、実に93年も前のことであった。

（商船学科 児玉 敬一 先生）

小杉健治の作品の紹介

人の性格はイヌ型とネコ型に分かれるそうだ。屋久島では一日25時間雨が降る、と言われるが、一年366日活字の海を泳いでいる自分はイヌ型かネコ型か、どっちだろう。ミステリー作家の東野圭吾や黒川博行はけっこう初期のものから読んでいるのであまり参考にはならないが、今回取り上げる小杉健治について振り返ると、自分の読書はイヌ型なんだろうと思う。イヌ型とはつまり、「人に付く」のである。出版社やジャンルを決めて追いかけるようなのは、「家に付く」のでネコ型だというわけである。ちなみに、経営者や屋号が変わっても同じ場所にある店に呑みに通うのはとうぜん、ネコ型である。

閑話休題。小杉健治である。初めはミステリーばかり書いていた。法廷ものも書いていたから、評論家は彼を社会派ミステリー作家と言ったがそんな分類はこの際、どうでもよい。ある時、法廷ものの『原島弁護士の処置』を読んだからイヌになってしまった。何かが違う、という印象を受けたように思う。裁判そのものをリアルに味わいたければ和久峻三を読めばいい。しかし、小杉健治は事件にかかわる「人間」を描いた。それも淡々と、である。これは容易なことではない。

『下へのぼる街』—この逆説的なタイトルの由来はなんだろうか。作品を終わりまで読めばわかる。それは「ここ（山谷というドヤ街）は行政が見捨てた労働者達の街です。行政に見捨てられた我々には戸籍なんか不要だ。私には家族もない。社会のしがらみもない。ただ、我々には仲間がある。この街こそほんとうに天国に一番近い場所だと思います。」という言葉で、わかるのだ。

最後に、社会の底辺で生きる人々ならでは、という詩が書かれているので紹介したい。

よろこびが集まったよりも

悲しみが集まった方が

しあわせに近いような気がする

強いものが集まったよりも

弱いものが集まった方が

真実に近いような気がする

しあわせが集まったよりも

ふしあわせが集まった方が

愛に近いような気がする

（星野富弘より）

（総合教育科 神谷 正彦 先生）



星新一著『きまぐれロボット』(角川文庫)

若いころに読んだほうがより楽しめる本というのは確かにあると思う。星新一氏の1000編を超えるショートショートを小中学生のころに夢中で読み漁ったが、今では手にとっても最初の鮮烈な感動がなくなっている。氏のアイデアが優れていて、読み返すと筋を思い出してしまうことも一つの原因だが、感受性が変わってしまったことが大きい。素直でなくなってしまったのだ。若いころは、氏の作品はアイデアが重要で技巧はあまり関係ないと思っていたが、今では文章構成力のうまさに驚かされている。しかし、最初に読んだときの感動はやはり奇抜なアイデアに対してであり、今回、若い皆さんに独自のショートショートの世界を紹介したいと思ったわけである。ところが、氏の作品のなかで、なにが一番お勧めであるか選ぶのは難しい。なにしろ重複しないアイデアを用いた1000編以上の作品があるのである。そこで、最近映像化された「きまぐれロボット」の原作を選ぶことにした。これは若干子供向けの作品であるが、星新一氏の独自の世界を十分に味わうことができる。これは角川文庫であるが、新潮文庫から一番多く作品が出版されている。なるべく全作品を読破して欲しいと一ファンとして願う。

アレクサンドル・デュマ著／山内義雄訳『モンテ・クリスト伯(全7巻)』(岩波文庫)

岩窟王という名前の方が有名な小説であるが、その原書訳である。講談社文庫の訳の方が好きだったが、現在は絶版になっており岩波文庫でしか入手できない。岩窟王として短くまとめられた話を何度か読み、興味があったので高校生のときに原書訳を入手してみたが、あまりの違いに驚かされた。岩窟王の方は、日本的な味付けになっており、それはそれで面白いのかもしれないが、原作とは別物である。特に原書の豪華で華麗な世界が全く出てこないのである。当然であるがキリスト教の教えが小説の根底に強く流れており、最初はとっつきにくい、ナポレオンが活躍した時代の貴族の華麗な生活や東洋の神秘さへの憧れの描写は、何度読んでも面白い。東洋での復讐の掟に従いながらもキリスト教徒として生きる主人公の葛藤の物語は、ダイジェスト版では登場しない多くの人物と関わりあいながら緻密に構成されているのである。これは勸善懲惡の復讐の物語を超えて、魅力ある主人公のエドモン・ダンテスの華麗でもあるが苦悩の人生の記録である。そして読み終えたときには、キリスト教徒の生き方、考え方を肌で感じることもできるかもしれない。

(以上2冊、情報工学科 伊藤 芳浩 先生)

エレン・ジェファーソン著『なぜか「お金が貯まる人」の習慣』(文化社)

多くの人間は、きっとお金のことが好きなのだろうけれど、特に日本人は、お金が好きだということを出すとマイナスイメージを持たれてしまうから、自らお金が好きだとか、たくさんお金を稼ぎたい、貯めたいとは言わないことが多い、と私は思う。でも、お金が好きなのは、決して間違っていないし、マイナスイメージを持つものではないと思います。ぜひこの本を読んで、お金を貯めて、幸せな人生を送ってください。

アンブローズ・ピアス著／筒井康隆訳、『筒井版悪魔の辞典 <完全補注>』(講談社)

これは本ではなく辞書です。だから、どこからページを開いても構いません。この本は、色々な言葉を、批判的で嘲笑的に解説しているけど、真理だなと思ってしまうことばかりです。しかも、笑えます。1人で読むのはもったいないので、ぜひ、友達と読んでみてください。この本に載っている言葉とその解説を1つだけ紹介します。

LOVE【愛】 一時的な精神異常で、結婚させるか、または錯乱を招いた原因である影響者から隔離することで治療できる。

(以上2冊、情報工学科 峯脇 さやか 先生)

小林紀晴著『ASIAN JAPANESE』(新潮文庫)

東南アジアを中心に放浪旅をしている人々を描いた本。新聞社のカメラマンだった著者が20代前半で会社を辞め、自らも挫折感をひきずりながらアジアを旅して実際に出会った日本人の記録である。登場する旅行者の中には若者もいれば老人もいる。女性もいる。彼らのアジアにおける現実が描かれており、同時にアジアに親しみを覚える本でもある。

苦悩しながら旅を続ける著者が、取材者の立場で彼らの旅の目的について問うようなことはない。ただ、会話の中から学校や仕事といった日常から非日常の空間へ、あるいは日本からの逃避などといったそれぞれの事情がぼんやりと映し出されている。何人かは日本に帰国した後の様子も描かれており、若い旅行者の口から旅で何が変わったのか、何を得られたのか話が語られている。はっきり言って、飾った言葉もなければ、感動的なエピソードが多く描かれているわけでもない。しかし、著者自身も含め、旅の途中である彼らが懸命に生きている姿そのものが魅力的である。また、著者が撮影した旅行者の写真が挿入されており、それぞれが彼らの人生のハイライトのように輝き、美しい。

(電子機械工学科 園部 元康 先生)

新しいPCを6台設置

図書館に新しく6台のノートパソコンを設置しました。Webページの検索や休日のコンピュータの利用などに活用することができます。



蔵書検索システム E-Conan

長岡技術科学大学の蔵書検索システム「E-Conan」を使って図書の検索ができるようになりました。本校図書館のみならず、他の大学や高専の図書館に所蔵して



ある本も検索可能です。本校図書館の新作図書も確認することができます。また、本校図書館のホームページ (<http://www.yuge.ac.jp/library/>) もこれにあわせてリニューアルされておりますので、ぜひご活用ください。

図書館利用状況

(平成 18 年度)

(1) 入館者数

事 項	合 計
学 生 (人)	15819 2230
教 職 員 (人)	1323 101
部 外 者 (人)	192 152
計 (人)	17334 2483
開館日数 (日)	221 248
一日平均 (人)	78.4 10.0

(2) 館外個人貸出数

事 項	合 計
学 生 (人)	1432 192
教 職 員 (人)	240 16
部 外 者 (人)	22 8
計 (人)	1694 216

(3) 館外個人貸出冊数

事 項	合 計
学 生 (人)	2328 305
教 職 員 (人)	740 24
部 外 者 (人)	76 33
計 (人)	3144 362

(4) 図書貸出状況 (分類別)

分類別	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	その他	合 計	貸出日数	一日平均 貸出日数
	総 記	哲 学	歴 史	社会科学	自然科学	工学技術	産 業	芸 術	語 学	文 学				
合計	190	63	88	131	158	1191	34	56	63	1158	12	3144	221	14.2
百分率 (%)	6.0%	2.0%	2.8%	4.2%	5.0%	37.9%	1.1%	1.8%	2.0%	36.8%	0.4%	100%		
	6.1%	1.9%	1.1%	3.0%	4.4%	34.3%	0.6%	1.7%	2.8%	38.4%	3.0%	100%		

一 編 集 後 記 一

みなさんは、日常生活の中で自分の考えを文章にまとめることはありますか。簡潔で、伝えたい内容が明確な文章を書く能力があるということは、大きなアドバンテージとなります。博識であっても、それを他人に発信する能力がないと役には立たないからです。普段から日記を書いたり、手紙を書いたりしている人は、自然に文章を書く能力が磨かれていることでしょう。最近では、パソコンを使った電子メールや携帯メールも普及していますが、これらで長い内容を発信することはあまり好まれないので、文章を書く能力を養うことには適してないかもしれません。

良い文章を書くための一つの方法は、いろいろな人が書いた文章を読むことだと思います。図書館だより第 12 号では、学生のみなさんや先生方からおすすめの本を紹介していただきました。まずは、紹介文に目を通してみてください。短い文章ですが、筆者の個性が表れているのではないのでしょうか。また、興味がある本があればぜひ読んでみてください。もし、時間が余ったときには、図書館に足を運んでみてはいかがでしょうか。専門書や文学書など、興味がある本を手にとって読んでみましょう。

まずは気楽に、少し興味が沸いたその一冊から・・・。